

アテナイのエジプトに於ける敗戦の結果について

鈴木 雅也

序

(一) 第一回エジプト派遣艦隊の兵力及びその損害数

(二) 遠征失敗後に於けるアテナイの危機について

(三) 結語

本論中個有名詞の発音はエジプト、フェニキア、ツキジデスの如く呼び慣わされているものは之をそのまま使用した。又年代は特記しない限り「西紀前」を指す。

序

本稿に謂うエジプト遠征とはツキジデス一巻一〇四、一〇九、一一〇にのべられたアテナイ及びその同盟国のエジプト遠征を指す。本論の目的とする所は此の遠征に際しアテナイ及びその同盟諸邦のエジプトに派遣した艦隊の数及びその損害数の推定である。即ち果してアテナイはツキジデスののべる如くエジプトに於て派遣艦隊二五〇艘の大部分を失つたか否かを検討する事である。^①かかる大艦隊の喪失は直ちにアテナイの政情に重大な影響を及ぼす事は当然であり、

従つてエジプト遠征の敗戦が四五〇年代後半にアテナイに政治的危機をもたらしたか否かも併せて此処に問題とされる。

註1 ツキジデスによればアテナイは最初二〇〇艘の艦隊をキュプロスよりエジプトに派遣し。(Thuc. 1. 104. 2) つづいて敗戦直前に五十艘の増援艦隊を送っている。(Thuc. 1. 110. 4) 此のうち前者はプロンピテスに於て一年六ヶ月の包圍攻撃をうけたのちペルシヤ軍に敗れ「多くの者のうち僅かのものがリビアを経て、キュレーネに達し、生命を全うして逃げ帰つたに過ぎなかつた」(Thuc. 1. 110. 1) 又後者もメンデス河口に於てフェニキア艦隊のため敗北を喫しその大部分は破壊された。(Thuc. 1. 110)

一、第一回エジプト派遣艦隊の兵力及びその損害数

ツキジデスが伝える所によれば、アテナイはリビア王イナロスのペルシヤに対する反乱を援助するため、当時恰かもキュプロスにあつたアテナイ及びその同盟諸国の二〇〇艘の艦隊をエジプトに派遣した。^① 艦隊はキュプロスを發し、海よりナイル河をのぼりメンプフィスの三分の二を攻略し、残りの三分の一である「白城」とよばれる部分の攻撃を続行した。(Thuc. 1. 104) ツキジデスは此処でエジプト遠征に関する記述を中止し、一卷二〇五より二〇九に至るまでエジプトには触れる事なく、一〇九に於て突如遠征軍の苦戦を報じ、つづいてプロンピテスに於ける敗北をのべ、更に一〇に於て、*Kai onírou arò roídon poréuómenoi diá tēs Aléxons eis Kephyn eadónan, oí de pñéōtois arólaon to*^②と敗戦の実状を表現してゐる。従つて彼によれば二〇〇艘の艦隊が艦船、兵員共に全滅に近い大打撃をうけた事は疑を容れない。事実彼はエジプト遠征を「大遠征」とよんでいる。ツキジデスが遠征を *tēn metámpotpatéian*^③と表現する事は異例の事に属する。とくに彼がペロポネソス戦争以前の *Pentecontaia* の描写を控目に表現する事に意識的に留想していた事を思えば、彼が此の遠征及びその敗戦の規模をいかに重大視していたかは瞭然たるものがある。即ちエウリユメドンの戦(Thuc. 1. 100) キモン最後の遠征たるキュプロス遠征(Thuc. 1. 112) 及びサモスに対する活動(Thuc. 1. 115—117)にはすべて二百艘の艦隊が動員されているが「大遠征」とは表現され

ていない。^④かく見るならばツキジデスはエジプト遠征のためにアテナイが派遣した艦隊については全部で二五〇艘、従つて第一次の派遣艦隊は二〇〇艘であつたと確信していたと判断し得る。

しかしながらエジプト遠征は開始より終結にいたるまで六年の歳月を要し、第一回派遣艦隊も又増援艦隊もその最後の年に相ついで壊滅せしめられている。且つ第一回派遣艦隊に対するペルシャ側の総攻撃は敗戦前一年六ヶ月頃より開始された。^⑤それ故二〇〇艘の艦隊が全滅に近い打撃を蒙つたとするならば、此の艦隊は開戦当初より四年半の間エジプトに駐留したと考えざるを得ない。ツキジデスは派遣艦隊の数は明確な数字を以て伝えているにもかかわらず、損害数に關しては之を明示していない。従つて敗戦以前の四年半の間に艦隊の一部は他に転用され、全滅的打撃を蒙つたのは残存艦隊であり、損害数も亦下廻るであらうと云う推測は充分なされ得る。ツキジデスは此の四年半の間の艦隊の行動については何等触れていない。しかし彼は一卷一〇九に於て再度エジプトに筆を転じ最初の句（他方アテナイ人及びその同盟国人はエジプトに留り……）（Οἱ δ' ἐν τῇ Αἴγυπτῷ Ἀθηναίων καὶ οἱ σύμμαχοι ἐπέμεινον……）によつて一卷一〇四とつないでいるが、此の句より、派遣艦隊の他への転用及び転用されたのであるが彼が之を報告しなかつたという事を推測する事は困難である。^⑥事実彼の敘述の他の例を見ても、艦隊の転用については、それ程重要でないものでさえ、之を報告するのが通常である。^⑦

以上により断ずるならばツキジデスはあくまでエジプトへの第一回派遣艦隊は二〇〇艘であり、且つ此の艦隊はプロソピデスに於ける敗戦時までエジプトに留りその地に於て全滅的打撃を蒙つたと確信していたと言ひ得る。

上にのべたツキジデスの報告が真実であるならば、戦後に於けるアテナイの政治的危機も亦あり得る。しかしながらツキジデスの、べる派遣艦隊数及びその損害数と全く異なる数字はクテシアス（Ctesias）によつて伝えられている。此のペルシャにあつた医者は、明らかにペルシャ側の資料に基きつつ、アテナイのエジプト遠征に關し異つた事情を伝えている。彼によればアテナイの派遣艦隊はクハリティミデスの指揮下に屬する四十艘であつた。^⑧更にクテシアスの伝え

る所により重要な相違点をあげれば、パレミスに於けるイナロスの獲た勝利の後、八十艘のペルシャ艦隊はアテナイよりの派遣艦隊のために惨敗を蒙り、そのうち二十艘は乗組員と共に捕獲され、三十艘は撃滅された。^⑩以来クハリティミデスは四年間指揮官として留つた。^⑪その後ペルシャはメガビュゾスの指揮する援軍を送りついに終戦一年六ヶ月以前に、アテナイ艦隊に破局的打撃を与えた。此の時のアテナイ及び同盟艦隊の損害は六〇〇人以上であり、^⑫彼等は捕虜としてペルシャに連行され、そのうち五十人は処刑されたが他は本国への帰還を許された。^⑬

以上の如きクテシアスの報告はツキジデスのそれと鋭く対立する。派遣艦隊数、損害数及び多数の捕虜の存在した事の三点に於て相違する。即ちアテナイの損害数は艦船人員共にツキジデスの伝えるが如く大規模なものではなく、しかも戦闘員の大部分は、クテシアスによれば帰還を許されて居り、従つてアテナイの戦闘力は此の点に於ては大損害を蒙つて居らない。しかしながら學說史的に見て、クテシアス説に対する無視、ツキジデスの優先的立場は根強い。古典に於ても明らかにクテシアスを参照したと思われるエフォロス、^⑭及びエフォロスにもとづいたディオドロスはともにクテシアス説を斥け、ディオドロスによれば派遣艦隊は三〇〇艘 (Diodoros Siculus, XI, 71, 5, XII, 25, 2.) もしくは二〇〇艘 (ibid. XI, 74, 3) と伝えられて居る。その後近代しかも十九世紀末に至つてエドワード・マイヤー (Edward Meyer) がツキジデス説に対して、疑問を暗示する時、彼はツキジデスの誤を感じた最初の人であつた。^⑮更にブゾルトも亦アテナイ艦隊の少数であつたかも知れぬ事に注目しているが、しかし彼は結論的には之を否定している。^⑯此の様なツキジデス説が定説化された事實は、後にのべるであろう遠征後に於けるアテナイの危機説と当然結びつけられる。

之等の矛盾する二説はいかに調整されねばならぬか。之に關しては次の二点から考察される。

A、キュプロスにあつた金二百艘の艦隊は一部のみエジプトに派遣された。従つて實際にエジプトに急行したのは最初から少数であつた。

B、二〇〇艘の艦隊はツキジデスの如くエジプトに向つた。その後その大部分は他に転用されて、エジプトには四十艘が留つた。

此のうちAに対しては、艦隊派遣に関するツキジデスの疑を容れる余地のない明快な記述が反証となる。彼はその後四五〇年キモン最後の遠征に際し同じくキュプロスよりエジプトに、二〇〇艘中六〇艘の艦隊が分遣された事実をのべている。^⑦従つて当面の問題に於ても、もし艦隊の一部が分遣されたならば之を当然のべる可きである。しかしA説を支持すると思われる説も亦存在する。即ちアテナイ、エレクティス部族の戦歿者表の頭書の一句がその資料である。「以下の人々は、各地に於て同一年に戦死した。キュプロス、エジプト、フェニキア、ハリエイス、アイギナ、メガラに於て。」^⑧と、そこには記されている。それ故キュプロスにあつた全艦隊がエジプトに向つたのではなく、一部はエジプトに赴き、他は戦歿者表の示す如く各地に派遣され戦闘が行われたと見るのである。

しかしながら、此の句によつてキュプロスへの派遣艦隊の一部がエジプトに分遣された事実を証明するためには、エジプト遠征の開始と他の遠征とが「同一年」であつた事実が証明される事を前提とする。何故ならエジプト遠征に際して、その開始年度と同じく、二年目、三年目にも戦死者は存したはずであるからである。^⑨年代的に云つて、エジプト遠征の開始は、上述の諸遠征と同一年ではない。^⑩従つてエレクティス族の戦死者表はBの証明になり得てもAの立場を擁護するものとはなし難い。以上により此の立場にもとづき、エジプト遠征が当初より少数艦隊によつて決行されたと云う事は認め難い。

エドワード・マイヤーは艦隊の一部帰還を暗示しているが、その時期はエジプトに於て「最初の成功の後に」^⑪である。即ちアテナイ及び同盟艦隊のナイル河制圧もしくはメンフィスの攻略後を意味している。従つて前述のBの立場に拠るものである。クテシアスはアテナイのイナロスへの援助艦隊は四十艘であると明言している。此の数字の報告は精密に考察さる可きである。四十艘の艦隊が最初から派遣されたとするならば、それはむしろ前述のA説に属する。し

かしながら後にペルシヤがメガビゾス指揮下の援軍を送つた時に、アテナイの艦隊は四十艘であつた。そのためクテシ阿斯は此の艦隊が最初からエジプトに派遣されていたと云う誤つた確信を持つていたかも知れぬ。即ちクテシ阿斯も亦遠征の初期に關しては多くを聞知してないがため、四年以前の事情を推察したかも知れぬのである。^②あるいはアテナイ艦隊の二百遣はナイル河口に於て (*κατὰ θάλασσαν*, Pers. 32) ペルシヤ艦隊を破り、その後此のうち四十艘はナイル河をさかのぼりイナロスの軍に合した。何故ならば明らかにイナロスは艦隊を所有して居らず、ナイル河口の海戦に参加する事は不可能であり、更にイナロスは当面の敵を背後に残してアテナイ艦隊と合するために北上するとは考えられぬからである。従つてペルシヤ艦隊に対する勝利は二百艘の艦隊によつてナイル河口に於て獲られ、その後、その四十艘のみがナイル河をメンプフィスまで航行しイナロス軍と合したと考えられる。それ故派遣艦隊は二〇〇艘であつたが、敗戦前一年六ヶ月頃プロソピテスに於てペルシヤ増援軍によつて包圍され、敗北したアテナイ及び同盟艦隊に四十艘であつたと云い得る。

かくてマイヤによつて暗示されたアテナイ及び同盟軍の撤退と云う歴史の再構成は可能性をもつ。ゴムはマイヤの暗示に止めた点を更に押し進め、ツキジデスの記述のうちにその根拠を求めている。^③即ちツキジデスはメンプフィス攻撃をのべた後にギリシヤ本土に眼を転じているが、ギリシヤに於けるアテナイ艦隊の能動的な活躍は二〇〇艘の艦隊をエジプトに留めて置いては不可能であり、その大部分は本国に帰還したとし、クテシ阿斯説を承認している。更に此の様に見るならばツキジデスの次の記述は極めて重要な意味をもつ。ツキジデスはエジプトに於けるアテナイ艦隊の白城攻撃をのべた直後一卷一〇五に於てミユロニデス指揮下のアテナイ軍が「市に残された最年長者と最年少者から偏成された軍隊を以て」^④メガラを攻撃したとのべ、その理由として当時アテナイ軍はアイギナとエジプトに軍隊を派遣している事をのべている。しかしながらその直後に行われたタナグラへの遠征に際してはアテナイはその盟軍と合して一万四千人の軍隊を動員している。^⑤更にアテナイはアイギナ派遣軍は動かすことなく此のタナグラ戦を行つて居り、アイギナよ

りの徴収は、彼地に於いて勝利を得たのち、即ちタナグラ及びオイノピュタの戦の後である^⑧。それ故メガラへの遠征の後にアテナイは大軍を動員せしむる程の軍隊を他処より転用して居らねばならず、しかもそれはエジプト以外にはあり得ないのである。

しかしながらメガラへの遠征とタナグラ戦との中間期間は、前者を四五九もしくは四五八年とするならば、エジプト遠征開始と艦隊の帰還との間に一年余の歳月が介在する。エジプト遠征の開始は四六〇―四五九アルコン年である。キュプロスより発した二〇〇艘の艦隊がナイル河口に於ける緒戦の勝利の後に撤退したとするならば此の一年余の期間内の艦隊の行動について疑問の余地が存する。又二〇〇艘の艦隊の全部が、河口に於ける勝利後にイナロスの軍に合するためナイル河をさかのぼつてメンプフィスに向い、同地攻略の後に撤退したとしても一年余の歳月はやはり空白として残される^⑨。

元来、二〇〇艘の大艦隊が最初いかなる目的のためキュプロスに派遣されていたかも知られていない。事実四六二―四六一年のキモン追放以後アテナイが東方に於て武力を用いた事は伝えられていない。それ故ゴムに従つてキュプロスへの艦隊の派遣は軍事的示威運動であつたであろうと推測する事は正しいであろう^⑩。エジプトに於ける緒戦の後に、メンプフィスに向つた艦隊を除いた残余は、その後あるいはギリシャ本土に向い又一部は本来の任務たるデモンストレーションにたちもどつたと推測しても不可ではない。メンプフィス攻略まで全艦隊が統一行動をとり、その後四十艘を除く他の艦隊は本来の任務にもどつたかも知れぬ。いづれにせよ、撤退した艦隊の任務の一つはゴムの主張する如くであろう。更にウエストレイクは「エジプト遠征のあらゆる段階に於てペルシヤの関心を戦の主要な舞台から転ぜしむる事がアラナイの関心事であつた」とするならば、艦隊の大部分は他に転進し、ペルシヤ軍とくにフェニキア艦隊のエジプトへの援助をキュプロス、フェニキアの沿岸に於て牽制しエジプト遠征を有利に導こうとする事はアテナイにとつて重

要なる任務たるを失わない。

以上の如き推測を裏づけるものとして、さきにかかげたエレクテイスの戦歿者表の頭書は重要である。之によればキュプロス、エジプト、フェニキア等に於て同一年に戦歿した者の氏名が記されている事となる。キュプロス、フェニキアに於ける此の時期の戦況に關しては古典は沈黙を守っている。しかしエジプト遠征開始後に於ける之等の地域に於て戦闘が行われたとするならば、それは上述の如き艦隊行動の結果であると判断し得る。

以上によりツキシデスの報告にかかわらず、エジプトへの派遣艦隊二〇〇艘はその後他に転用され、エジプトに留つたものは四十艘であり、後にペルシャ軍に敗れた艦隊は此の残存艦隊であつたと結論する事は可能である。

註 1 何故にキュプロスに二〇〇艘の大艦隊が派遣されていたかは、ツキシデスはじめ古典は伝えていない。之については後述する。

2 「多くの者のうち僅かのものがリュビアを経てキュレーネに達し、生命を全うして逃げ帰つたに過ぎなかつた。」

3 Thuc. I, 110. 5.

4 ペロポネソス戦争に際してさえ、大軍を以て行われたシタルケスの遠征をツキシデスは次の如く記している。（「かくてシタルケス遠征の経過はかくの如くであつた」―拙訳）

5 Thuc. I, 110. 4.

6 Westlake, H.D., *Thucydides and the Athenian Disaster in Egypt*, *Classical Philology*, Vol. XLV, 1950, 112.

7 Thuc. I, 112. キモン最後の遠征であつたキュプロス遠征に際して、同じく二〇〇の艦隊が動員されたが此のうち六〇艘がエジプトに派遣された事実をツキシデスは明記している。しかも此のエジプトへの派遣はさほど重要なものではない。

8 Ctesias, *Persica* 32.

9 ツキシデスは此の事実を伝えてゐない。 cf. Herodotus III, 12.

10 Ctes. *Pers.* 32.

11 *ibid.* 33.

- 12 *ibid.* 34. 此の人員は四十艘前後の艦隊の乗組員の数に適合する。ツキシデス説によれば人的損害は三万人を超える事となる。
- 13 *ibid.* 35. 36. 37.
- 14 エフエロスは明らかにクテシメスを参照している。しかしエフエロスの記述によつたと思われるデイオドロソスの伝える所ではクテシメスの数字は無視せねばならぬ。
- Meyer Ed. G.d.A. V. 570. n.1. Stuttgart, 1944. Gomme, A.W., A Historical Commentary on Thucydides. Vol. 1, 1950, Oxford, 44—45. Westlake, H.D. op. cit. 209, n. 2.
- 15 Meyer, Ed. G.d.A. III, 606, in the 1st ed. cf. Westlake, H.D. op.cit. 209, n. 7.
- 16 Busolt, G., Griechische Geschichte, III. 1, 331, n. 3.
- 17 Thuc. I. 112.
- 18 Tod, M.N., A Selection of Greek Historical Inscriptions, Vol. I. Oxford, 1951, 26. (P. 40—43)
- 19 I. G., I² 929, 1—4. cf. Westlake, H. D., op.cit. 211.
- 20 Gomme, A.W., op. cit. 311 and 412, n. 2.
- 21 メリットはエジプト遠征の開始の年代の決定の根拠を此の戦役者表に求めようとする。(Meritt, B. D., Documents of Athenian Tribute. Harvard University Press, 1937, 92, n.59.) しかしながらヒュム及びベンゲツォンは之をとらず四六〇—四五九ブルホン年を以て遠征開始と見なしている。(Gomme, A.W., op. cit. 311 and 412. Bengtson, H., Griechische Geschichte, 1950, Munchen, 193.) 筆者は後者の説を採る。拙著「ソテナイのエジプト遠征及びその敗戦に於ける年代的考察」関西学院史学Ⅱ「私文録」四三一五〇頁参照
- 22 Meyer. Ed. G.d.A. Stuttgart, 1944, V. 570, n. 1.
- 23 Westlake, H. D. op. cit. 210, n.14.
- 24 ツキシデスはイナロソスが艦隊を所有したと述べている。
- 25 cf. Westlake, H.D., op. cit. 211, n. 19.
- 26 Gomme, A.W., op. cit. 322.
- 27 Thuc. I. 105, 1. 2. " I. 107, 3. " I. 108, 5.
- 28 Thuc. I. 105, 4.

エムによれば此の時の軍隊は五〇—五九才もしくは一八一—一九才のものによつて編制され、對外遠征には適さざる予備軍であつたものと云ふ。

Gomme, A.W., op. cit. 308.

27 Thuc. 1. 107, 5.

28 Thuc. 1. 108.

29 Gomme, A.W., op. cit. 411 and 412. 又タナグラに於ける戦は四五八一—四五七アルコン年である。

30 何故ならツキシデスは一卷一〇四に於てメンブフィス及び白城の攻略をのべ一〇五に於てメガラの戦を報じている。従つてキュプロスを發した艦隊が白城攻撃に至るまでの期間は短く、メガラの戦と時間的に相接するものとは思われない。事実ツキシデスは白城攻撃とメガラの戦の間に、ハリエイス、ケクリュパレイア、アイギナの戦の存した事を報じている。

31 Gomme, A.W., op. cit. 306.

32 二〇〇艘の艦隊がメンフィスまでさかのぼる事はナイル河の地理的条件より見れば不可能ではない。例えばエジプトに於けるヘルシヤ軍援助のためにメンブフィスに派遣されたメガビュゾスの指揮する艦隊は三〇〇艘と伝えられている。(Ctesias, Pero.

33, Diod. X, 77, 1.)

cf. Westlake, H. D., op. cit. 211, n. 18.

33 Westlake, H. D., op. cit. 211.

34 Tod, M.N., op. cit. 23.

二、遠征失敗後に於けるアテナイの危機について

エジプトへの派遣艦隊の数及びその損害については上にのべた如くであると結論する事は一応可能である。しかし之を最終的に決定するにはエジプトに於ける遠征失敗後のアテナイの危機の有無と関連して考察されねばならない。何故ならば増援艦隊をも含めて二五〇艘の艦隊が全滅に近い打撃をうけたとするならば、それは明らかに危機を招来するに足る敗戦であるからである。ヴィラモヴィツメメルンドルフ (U. von Wiamowitz-Moellendorf) は危機説をとり次

の如くのべている。「イナロスとの協同が決議された民会の召集はギリシヤ史の危機的な瞬間である」^①と。

危機の有無の決定は敗戦後に於けるアテナイ内外の事情、諸事件のうち敗戦と関係のあると思われるものをあげ検討する以外に方法はない。ツキシデスによれば敗戦の直後に二つの遠征とその中止がのべられ (Thuc. I. 111) つづいて三年間の平和な時期を経て、ペロポネソス人との五年間の平和が結ばれた事及びキモンのキュプロス遠征がのべられてゐる。(Thuc. I. 112) 又ブルタルコスが同盟の基金を収める金庫が此の敗戦によりデロス島よりアテナイに移転された事実をのべている。^② 古典の伝えるエジプトに於ける破局にもとづくアテナイの変化の重要なものは以上である。

之等は明らかに敗戦後の事態に備えるためにアテナイ当局のとつた政策である事は疑を容れない。二つの遠征とはミユロニデスのテッサリア遠征及びベリクレス指揮下のアカルナニア遠征である。両者はツキシデスによりエジプト敗戦後に記されているが、エジプトの敗戦後に両遠征が企てられ且つ中止されたのではなく、エジプト遠征の末期に同時に企てられ、その後エジプトの敗報がアテナイに達した後、急ぎ中止せられたものである。^③ 又三年間の平和の期間及び和平締結は、ツキシデスの年代的秩序は誤っており、敗戦直後に結ばれたものであり、^④ エジプトに於ける失敗後の事態に備えるためのものである。且つキュプロス遠征はその三年後であり、之を敗戦の影響下に置く事は無理である。同盟金庫の移転も亦ブルタルコスの説く如く敗戦の影響下になされた。

之等一連の諸事件はアテナイが敗戦の直後に政策を転換し従来の如き一方に於てペルシヤ、他方に於てスパルタと相対する二正面作戦 (Zwei Fronten Krieg) を放棄し、和平策に転じた事実を示す。しかしながら之等の政策転換は直ちに危機を意味するであらうか。事実アテナイの敵であるペルシヤとスパルタが反アテナイ的共同戦線を結成し、此の機会にアテナイを抑える事は充分考えられ得る。すでにペルシヤはエジプト作戦のはじまつた頃スパルタに対して反アテナイ戦線の結成を申し入れている。^⑤ 今やアテナイはエジプトに於て致命的打撃を蒙つたとするならば、此の様な動向があつたとしても異とするに足りない。にもかかわらず此の様な動きはなく、しかも三年後にはアテナイの二〇〇艘の

艦隊はキモンの指揮下にキュプロスに於て行動している。かく見るならばエジプトに於ける敗戦はアテナイにとつて致命的なものではあり得ない。それは決して軽い打撃ではなく、さしものアテナイをして和平に転ぜしめたといえ、危機と称するには程遠い。

危機の有無はアテナイとその支配する同盟諸国との間の関係からも考察されねばならぬ。敗戦は当然同盟加入都市のアテナイよりの離反を予想せしむる。盟邦は必ずしもアテナイに対する心服者ではなく、アテナイより武力を以て強制加入せしめられた都市も多く数えられる。エジプト遠征以前に於てすらタソスの反抗は有名である。今や敗戦によるアテナイの同盟支配力の弱化があるとするなら、離反の可能性も十分あり得る。

此の問題は次の二点から考察される。

- 1、同盟の東部、従つてペルシャの侵攻に際し最も危険視される地区に於ける都市の動向。
- 2、アテナイに対し反感をもちつつも、強制的に加入せしめられている都市の動向。

此のうち前者に關しては貢税表 (Tribute Quota List) は次の如き事實を示している。同盟の最東端プハセリスは最もペルシャの侵攻を受けやすい地位にあるがエジプトに於けるアテナイの敗戦の直後に於てさえ、アテナイに対し六タラントンの貢税^{ツァイロス}支払の義務を果し貢税表にその名を留めている。^⑥ プハセリスの例は、同盟都市のアテナイに対する信頼の依然存した事の一例である。

後者にあつて最も典型的なものは同盟加入国中の島嶼地区に属するものである。アテナイにより武力により強制加入せしめられたものが最も多いのは島嶼である。之等の地区に属するものは敗戦直後に一部貢税支払の義務を怠つたがアテナイに離反し、同盟を脱するに至つていない。^⑦

更に前記の1及び2の性格を併せ有する都市が存する。イオニアの諸都市が之に属する。イオニアは地理的にペルシャに接して居り、且つメイグスに従えば、アテナイが同盟軍をペロポネソス人に対して利用する事に不満を有し、な

おエジプト遠征中にはペルシャの最西部のサトラップは、ペルシャが金銭を供してスパルタとの協同を申し入れた際に、同様にイオニア諸都市に対しても此の様な働きかけを行つた事は十分に信じ得るとのべ、且つ四五〇年以前にアテナイより離反の証拠が見られ、その原因としてエジプトに於ける敗戦が暗示されている。しかし之とても重大にして広範囲のものとは思われない。^⑥

以上の如く見るならばアテナイの同盟に対する支配力は、敗戦の直後に多少弱化しているが、しかしペルシャに近接した地区にさえ支配力を有し、之を危機とよぶには出来ない。従つてエジプトに於ける敗戦の影響はアテナイを一時和平に転ぜしめた事、及び同盟内に貢税の義務を怠るものを一部生ぜしめた事の二つと断じ得、しかも前者は三年の平和な時期の後再度積極的対外活動に転じ、後者にあつても支払国はその後年を追うて漸増して居る。従つて敗戦はアテナイに危機をもたらしたとは断定し得ない。

註 1 von Wilawowitz-Moellendorf, u., Aristoteles und Athen, Berlin, 1893, I. 158, n. 62.

2 Plutarchos, Pericles, 12.

3 Nesselhauf, H., Untersuchungen zur Geschichte der Delisch-Attischen Symmachie, Klio, XXX. 1933. P.9.

4 Gomme, A.W., op. cit. 325. Bengtson, H., op. cit. 195. n. 4.

5 Thuc. I. 109, 2. ペルシャは金銭を以てスパルタを買収し、スパルタ軍をしてアツチカに侵攻せしめ様と図つたが失敗に終つた。

6 Tod, M.N., op. cit. 30 (P. 49—56). Gomme, op. cit. 290, 323.

7 同盟への強制加入口は島嶼国に多い。カリストス・パロス・アンドロス・ナクソス・タソス・メロス・アイギナ等がその例である。ネットセルハウフの算定によれば島嶼地区の加入國中、貢税支払を行つたもののパーセンテージは次の如くである。四五四—三年・八・三%。四五二—一年・二〇・八%。此の数字は確定的なものではないが大体の動向は之により知られる。

(cf. Nesselhauf, op. cit. 11—13. 及び上掲拙稿・五三一四頁、及び註一四)

8 Meigs, R., The Growth of Athenian Imperialism, J.H.S. LXIII, 1943. Westlake, op. cit. 209.

三、結 語

二〇〇艘の艦隊がキュプロスを發しエジプトに向つたと報ずる時、ツキジデスは正しい。しかし彼の敘述は此の艦隊が四年余エジプトにそのまま留つたと解される。何故なら彼は艦隊の他への転用について記していない。従つて之より推論される事は此の艦隊の全滅である。ツキジデスの誤りは此の点に存する。彼は此の二〇〇艘の艦隊が最初の勝利の後に他に転用され、エジプトには四十艘が留つたにすぎない事を知らなかつたのである。之は彼のエジプト遠征に関する資料の不足にもとづく。従つて損害数はクテシアスが報ずる所が正しく、戦闘員も亦リユビア、キュレーネを経て帰還し、アテナイはツキジデスの伝える如き大損害を蒙つて居らず、その結果戦後に於ても危機と称するが如き事態はアテナイには見られなかつた。

註1 ツキジデスが此を敘述したのは彼の追放中であるか、もしくは帰還後であつた。何れの場合にせよ彼は資料を蒐集するために有利な立場にはない。此の点については Westlake の論作はエジプト遠征の各方面に亘つてツキジデス史料不足を論じている。

cf. Westlake, H. D., op. cit.

附 記

本稿は更に二節を加える予定であつた。即ち第二回増援艦隊の數及びその損害について、及びツキジデスの史料的不足についてである。個人的事情をのべる事を許されるならば老父が重病に倒れて月余に及び此のため最初の目的を達し得なかつた、他日を期したい。

本稿を草するにあたり関西学院大学教授栗野頼之祐先生よりは貴重なる文献の閲覧を許され、又絶えざる御激励を賜つた。又神戸女学院大学中村順一教授は筆者の原稿提出の遅延のため多大の御迷惑をおかけしたにもかかわらず常に御好意を以て筆者の怠慢を許された。茲に記して謹んで謝意を表す。

一九五四、五、一〇